ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員　ジャクソン・バニスターの活動報告　　令和７年１２月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、毎月支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いましょう!

１２月の映画

『フランケンシュタイン』

２０２５年　アメリカ

Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員(CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。

映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～

前橋シネマハウス
MAEBASHI CINEMA HOUSE

映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていきたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていきたいと思います。

MISSION ―――――― 前橋千代田町五丁目1－16前橋プラザ元気21別館3階

前橋市役所文化国際課
ジャクソン・バニスター
第一号 令和七年十一月

フランケンシュタイン

（２０２５年）

幻想と悲劇が交錯する、デル・トロ渾身の怪物譚

『フランケンシュタイン』は**ギレルモ・デル・トロ**監督による、『パンズ・ラビリンス』や『ヘルボーイ』でも見せた、幻想的で不気味な世界観の創出における卓越した手腕を、改めて証明する作品となっている。英文学の巨峰ともいえる『フランケンシュタイン』にふさわしい豪華キャストにも恵まれ、デル・トロ監督はまさに本領発揮といったところだ。ヴィクター・フランケンシュタインを演じる**オスカー・アイザック**、そして「怪物」を演じる**ジェイコブ・エロルディ**が二枚看板を務め、さらに**チャールズ・ダンス**、**ミア・ゴス**、**クリストフ・ヴァルツ**、**デヴィッド・ブラッドリー**といった名優たちが脇を固め、いずれも見事な演技を披露している。本作は、これまでの多くの映画化作品とは異なり、1818年版のメアリー・シェリーの原作に大きく立ち返ったアプローチが特徴である。

まず初めに言いたい――なんという素晴らしい映画だろう！ そして何より、徹底的に**「ゴシック」**だ。デル・トロ監督は、心に思い描く“幻想的で、ゴシックで、ヴィクトリア朝風”の『フランケンシュタイン』像を余すところなく映像化してみせる。（こういった作品はトレンドになっているかもしれない。実際、すでにロバート・エガース監督の**『ノスフェラトゥ』**がドラキュラ像を再解釈しているように。）

深い影とろうそくの灯りが揺れるヴィクトリア朝の室内――どこか**『アマデウス』**や**『バリー・リンドン』**を思わせるような照明美と、劇的で嵐に満ちた夜の描写が、この象徴的な世界観に完璧に調和している。衣装も見事で、特に女性のは鮮烈な深紅や深みのある青、風変わりなヘッドピースなど、非現実的で色彩豊かなデザインが作品全体のドラマティックな雰囲気をさらに引き立てている。

映像美は圧巻の一言に尽きる。撮影監督は**『シェイプ・オブ・ウォーター』**でデル・トロ監督と組み、同作でアカデミー撮影賞を受賞したデンマークの名手ダン・ローストセン。これほど美しい画作りになるのも納得だ。カメラは常に動き続け、どこか落ち着きがなく、狂気に飲まれていく科学者を演じるアイザックの演技を映像がそのまま体現しているようでもある。特に心を奪われたショットが二つあり、ほかのレビューでも話題になっていたのを見かけた。古典音楽を中心とした幽玄で美しいOSTも映像と調和し、作品が目指す陰鬱で退廃的な雰囲気を完璧に作り上げている。

CGI と実写の特殊効果の融合も見事だ。アニマトロニクスを使ったシーンもあれば、アクションの多くは高度な CGI によって描かれるなど、双方を巧みに使い分けている。も実写とデジタルの絶妙な混合で構成されている。

そして特筆すべきは、この映画の決して生ぬるくないところだ。かなりの流血描写があるが、トーンにはこの上なく合っており、一般人を狙って表現を弱めるような妥協をしなかった姿勢はむしろ称賛したい。

さらに、昨今のマーベル映画でよくある皮肉的なユーモアが他作品にまで浸透し、真剣さが揶揄されがちな風潮とは一線を画し、最初から最後まで真剣な姿勢を貫いている。このブレなさは、実に清々しい。

150 分という長さにもかかわらず、冗長さは一切感じず、最初から最後まで惹きつけられ続けた。とりわけ俳優陣の演技が素晴らしく、オスカー・アイザックとジェイコブ・エロルディはまるで“どちらがより優れた演技を見せるか”という真剣勝負をしているかのようだ。チャールズ・ダンスは『**ゲーム・オブ・スローンズ**』で見せた冷徹な威厳を思わせる父親役で強烈な印象を残し、ミア・ゴスも素晴らしいが、個人的にはオスカー・アイザックの気迫が凌駕しているように感じられる場面もあった。

物語については、原作や既存の映画を知らない人のためにネタバレは避けるが、本質的にはギリシャ神話に代表される「人間の傲慢」を描いた物語であり、原題『**フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス**』がまさにそれを示している。文化を問わず響く力強いテーマを持った物語だ。

総じて、この作品を映画館で観られない人が多いのは本当に惜しい。ネットフリックスで観られるとしても、もし可能であれば前橋シネマハウスでの鑑賞を強く勧めたい。文学史に残る偉大な作品を、忠実かつ現代的に再解釈した本作は、まさに映写幕で観るに値する映画である。